

太宰府町の文化財

第 1 集

——菖蒲浦古墳群の調査——

昭和 50 年度

1 9 7 6

太宰府町教育委員会

序

わたくしたちの太宰府町には大宰府跡をはじめとして先土器時代から各時代にわたって数多くの重要な遺跡があり、古代九州における政治文化の中心地であったことは広く知られているとおりであります。

大宰府跡・水城跡などいわゆる、大宰府史跡の発掘調査は福岡県教育委員会と九州歴史資料館の手で昭和43年度より強力に進められ、次第にこれら遺跡の解明がはかられております。

さて、この度の菖蒲浦古墳群発掘調査は、太宰府町立太宰府南小学校新設に伴い、その敷地内に所在する古墳時代の円墳2基を太宰府町教育委員会が県費補助をうけて実施したものであり、その概要をまとめて印刷に付し、一般の活用に資する次第であります。

この調査と本書発刊にあたっては、九州歴史資料館ならびにご協力をいただいた地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和51年3月31日

太宰府町教育委員会

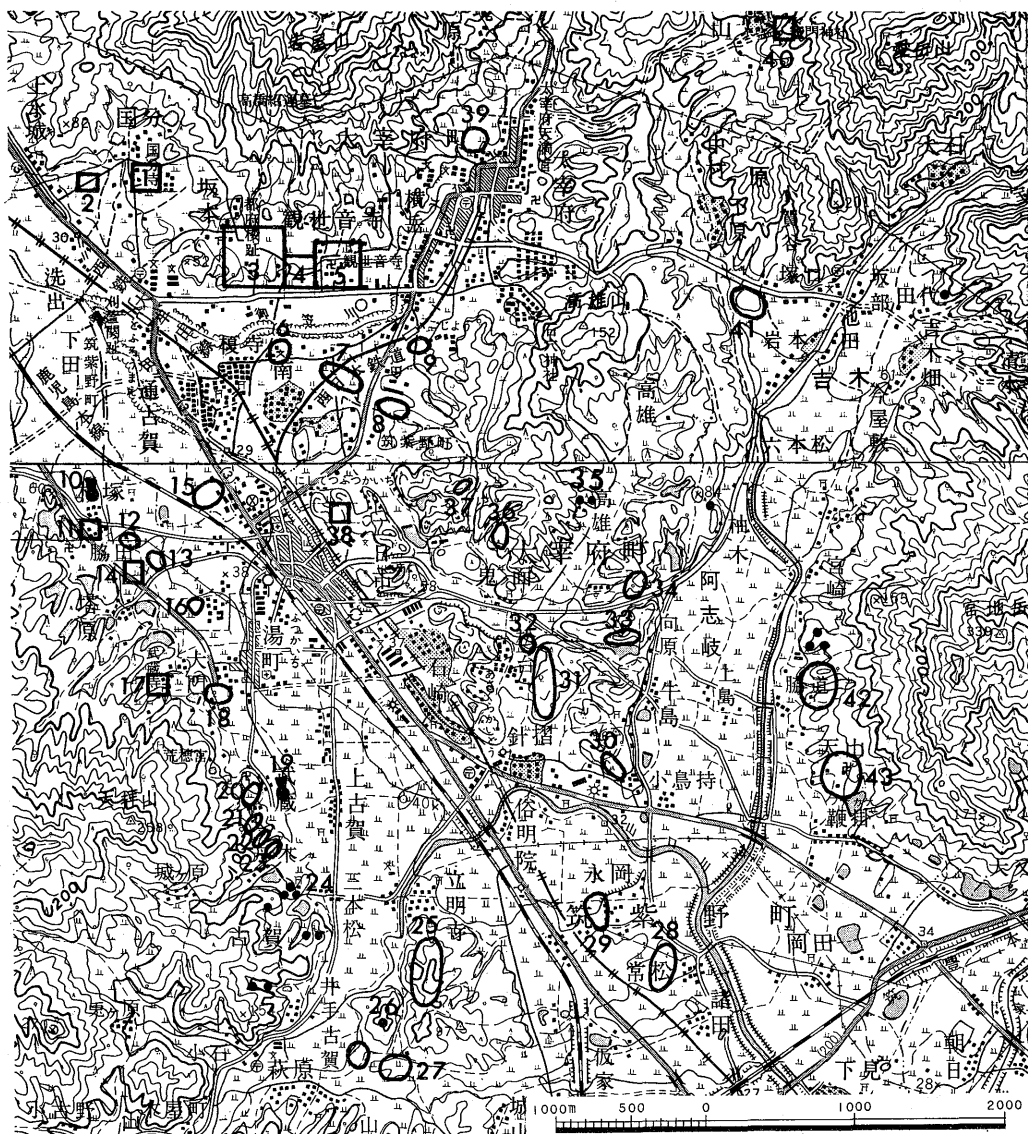
教育長 陶 山 直次郎

例 言

1. 本書は、昭和50年4月14日から昭和50年5月20日までに、太宰府町教育委員会が、県費補助を受けて、太宰府町立第4小学校（仮称）建設に先立ち、発掘調査を実施した、菖蒲浦古墳群の調査概報である。
2. 発掘調査には、福岡県教育庁管理部文化課の川述昭人・佐々木隆彦および九州歴史資料館の森田勉が従事し、庶務は太宰府町教育委員会の中山正行課長・岩井友雄係長・野津原弘明・蜷川二三雄が担当した。なお、調査補助員として鹿島英世・沢田康夫が参加した。
3. 掲載の図面は、各調査員が作成したものを森田・沢田が製図した。遺構写真のうち航空写真は九州大学の技官林崎价男がリモコン撮影機で撮影したものを使用し、他は九州歴史資料館の石丸洋・森田、県文化課の川述が撮影したものを掲載した。遺物写真は石丸の撮影によるが、鏡のレントゲン写真は福岡県立金属工業試験所の成富弘明・小野啓作両氏の協力を得た。
4. 本書の執筆は、Ⅲ(2)―出土遺物を森田・川述・橋口達也、Ⅳを沢田、他は森田による。編集は森田が担当した。

目 次

I はじめに	2
II 位置と環境	3
III 第1号墳の調査	4
(1) 墳 丘	4
(2) 1号主体部	7
(3) 2号主体部	13
(4) 3号主体部	13
(5) 4号主体部	13
(6) 5号主体部	13
(7) 6号主体部	14
(8) 7号主体部	14
IV 第2号墳の調査	19
V おわりに	23



第1図 大宰府周辺の遺跡群 (1 : 50,000)

- | | | | | |
|------------|-----------|------------|-----------------|----------|
| 1 筑前国分寺 | 2 筑前国分尼寺跡 | 3 大宰府政庁跡 | 4 学校院跡 | 5 観世音寺 |
| 6 鼓石遺跡 | 7 五条遺跡 | 8 君ヶ畑遺跡 | 9 大宰府史跡第30次調査地点 | |
| 10 剣塚遺跡 | 11 杉塚廃寺 | 12 唐人塚遺跡 | 13 塔ノ原遺跡 | 14 塔ノ原廃寺 |
| 15 市ノ上遺跡 | 16 桶田山遺跡 | 17 武蔵寺 | 18 道場山遺跡 | 19 原口古墳群 |
| 20 八隈遺跡 | 21 畑添2地点 | 22 畑添1地点 | 23 山の口遺跡 | 24 扇祇古墳群 |
| 25 立明寺遺跡 | 26 萩原古墳 | 27 萩原遺跡 | 28 常松遺跡 | 29 永岡遺跡 |
| 30 峠山・野田遺跡 | 31 野黒坂遺跡 | 32 大曲り遺跡 | 33 江牟田遺跡 | 34 吉ヶ浦遺跡 |
| 35 菖蒲浦古墳群 | 36 結ヶ浦遺跡 | 37 池田遺跡 | 38 般若寺跡 | 39 蒲城跡 |
| 40 内山寺 | 41 塚口古墳群 | 42 シメノグチ遺跡 | 43 天山古墳群 | |

I は じ め に

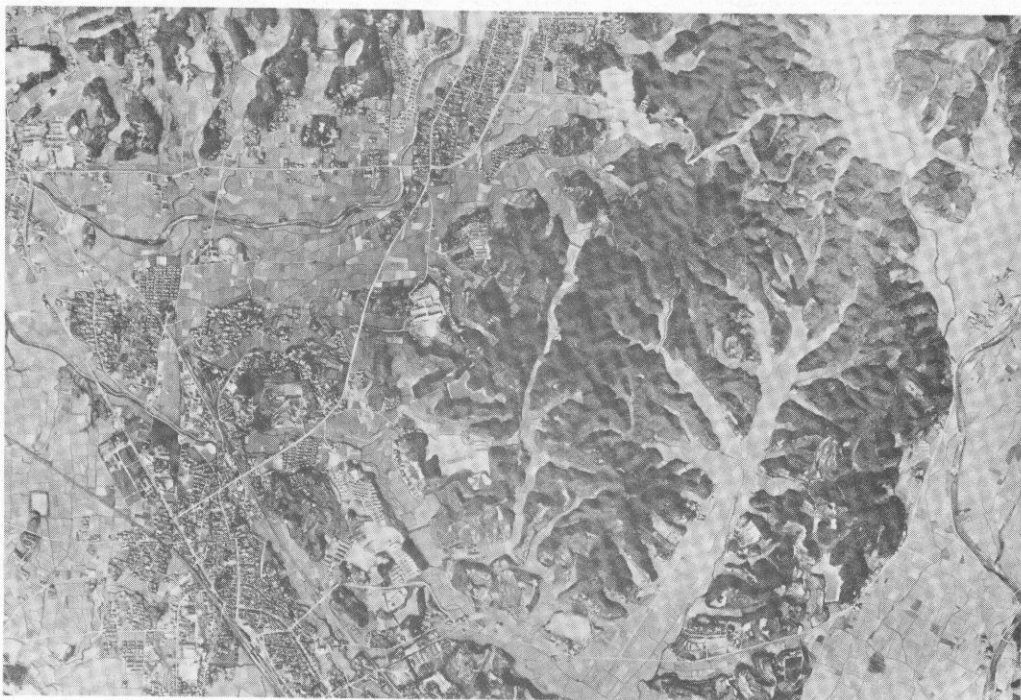
太宰府町は、九州最大の商業都市である福岡市の南約20kmの地にあり、この福岡市のベッド・タウンとして近年急激に丘陵や田畑が開発され住宅化して来た。それに伴い児童・生徒の数が増し、これに対応するため、町当局は新たに小学校を建設することになり、その候補地として、今回発掘調査を実施した菖蒲浦の丘陵が選ばれた。

対岸の東の丘陵には、弥生時代前期末から中期前半にかけての墓地および住居跡が発見され、発掘調査が実施されていたことから、この地にも埋蔵文化財が包蔵されている可能性があるとして町教育委員会は判断し、県教育委員会と事前の協議を持ち、先ず、分布調査を行うこととなった。分布調査の結果、古墳を2基発見したので、町教育委員会は、県費補助を受け早急に緊急発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和50年4月14日に着手し、5月20日に終了した。

東の古墳を第1号墳とし、西のを第2号墳とし、先ず、第1号墳から調査を開始した。その結果、第1号墳は7つの主体部を有する古式の前期古墳で、1号主体部から「方格規矩鏡」1面を発見し、きわめて貴重な遺構であることが判明した。第2号古墳は終末期の横穴式石室で、既に盗掘を受け天井石等は消失していた。

発掘調査終了後、調査資料の整理は九州歴史資料館で行い、図面および遺物は現在同館に保管している。



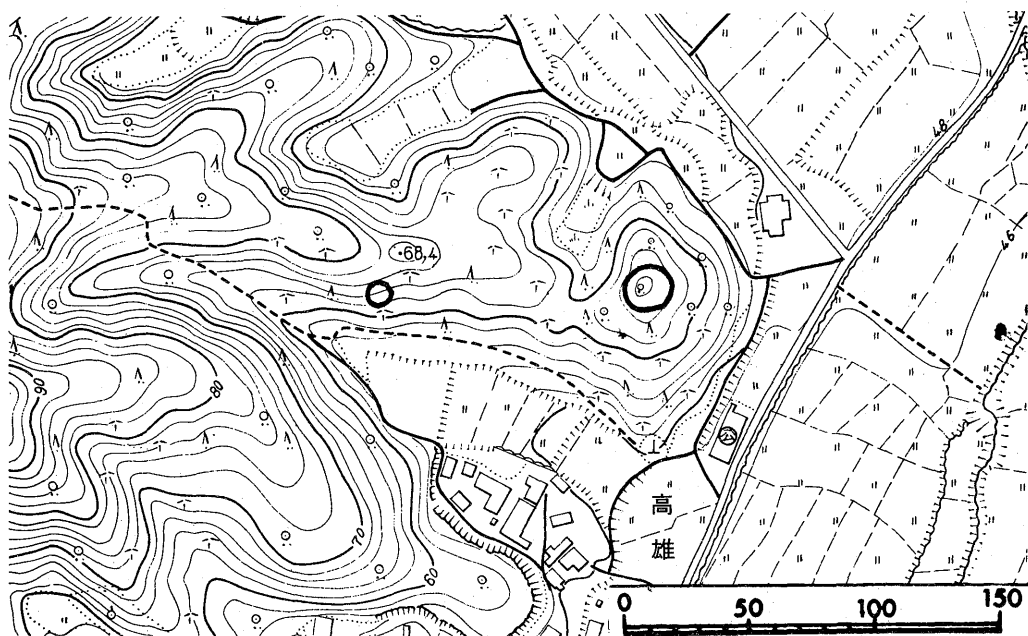
第2図 遺跡付近航空写真

II 位置と環境

遺跡は福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字菖蒲浦にある。

霊峰宝満山からおおよそ南へ延びる丘陵が高雄山を基点として大きく南に二つに分かれ、更に、この丘陵は幾多の解析された大小の谷を持っている。また宝満山に源を発し、玄海灘に流れ込む御笠川と筑後川を介し有明海に注ぐ宝満川は、高雄山を中心とした南へ延びる丘陵により南北の流れに分かたれる。今回調査した遺跡は丘陵の途中から東へ派生する小丘陵上にあり、現水田面との比高差は約22m前後を測る。

周辺の遺跡をみると、先土器時代から歴史時代にかけての遺跡が数多く、主として丘陵および台地上に所在している。先土器時代の遺跡としては、ナイフ型石器・台形様石器等を発見した野黒坂遺跡を初めとして数遺跡知られ、縄文時代の遺跡では晩期の住居跡を発見した阿志岐シメノグチ遺跡を先ずあげることが出来る。弥生時代になると比率的に遺跡の数は増し、前期から中期にかけての住居跡・貯蔵穴等を検出した野黒坂遺跡、大甕棺墓地の調査で知られる吉ヶ浦遺跡・道場山遺跡その他多数の遺跡を見出すことが出来る。古墳時代の遺跡では、多数の住居跡を検出した裏ノ田遺跡・野黒坂遺跡、前方後円墳としては三角緑神獣鏡の出土で知られる原口古墳・方墳の上に、その墳丘を利用して築造された剣塚古墳がある。歴史時代になると、古都大宰府といわれるように、九国三島の政治・経済の中心となった大宰府史跡を初めとして8世紀の竪穴住居跡を検出した成屋形遺跡、平安時代後期から鎌倉時代にかけての大規模な生活跡を検出した五条遺跡等数多くの遺跡がある。墓地としては、和銅開祿を副葬した蔵骨器を発見した結ヶ浦遺跡がある。



第3図 遺跡位置図(1:3,000)

III 第 1 号 墳 の 調 査

第 1 号墳は、当初中央および西側に大きな陥没穴があることから横穴式石室を持つ古墳と判断し調査を開始した。ところが、中央陥没穴を清掃してもそれらしい痕跡は認められなかった。そこで、盛土の状況を観るために東・南・西・北に各 1 本計 4 本のトレンチを設定した。その結果、東のトレンチで 1 号主体部、北のトレンチで 6 号主体部を検出した。これらのことから、1 号墳は数基の主体部を持つ古墳ではないかと予想されたので、全体の盛土を除去することにした。その結果、計 7 基の主体部を有する古式古墳であることが判明した。

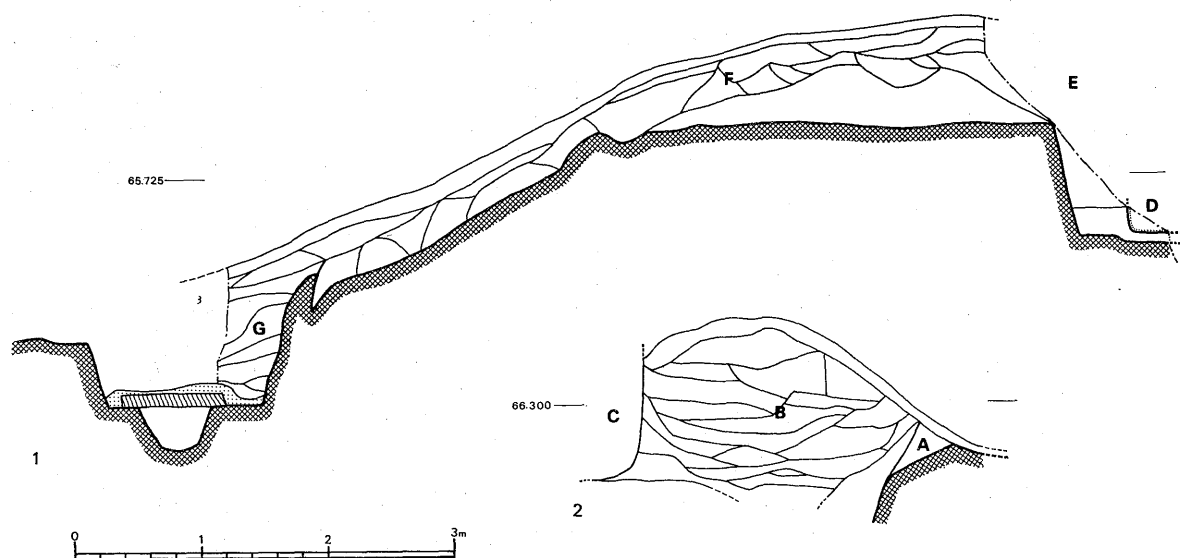
遺物は、第 1 号主体部から出土しただけで、他からは発見されなかった。

1 墳丘 (第 4 図)

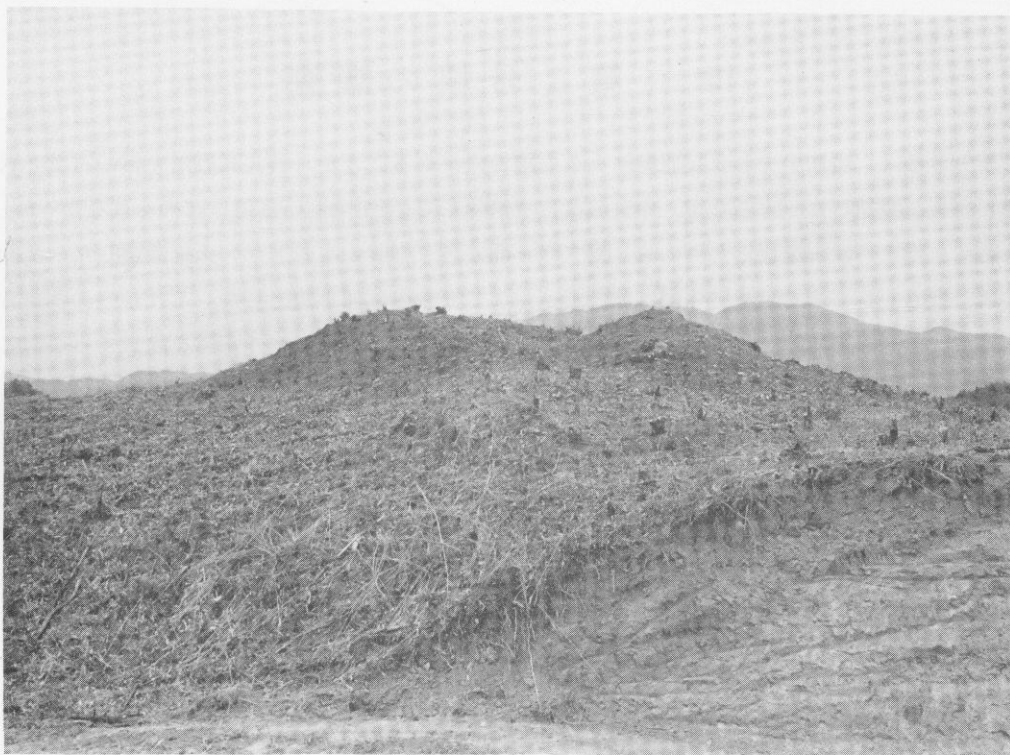
計 4 本のトレンチを設定したが、盛土の様子を観察出来たのは東・北の 2 本のトレンチで、他の 2 本は攪乱および流失のため不明である。

東のトレンチ (第 4 図 2) では、盛土は高さ約 1.4m 認められた。A は 4 号主体部の埋土で約 0.45m 残存している。B は 1 号主体部の埋土で、A を切り C (2 号主体部) によって切り込まれている。北トレンチの盛土 (第 4 図 1) は約 0.2~0.8m 残存しているが、その積み方は雑でまさにトロッコで積んだような状態である。6 号主体部 (G) は、盛土途中で、地山を掘搾し、土壇を造っていることがこの土層から観察でき、1・2 号主体部よりも古く、4 号主体部と同時期であると考えられる。他の 3・5・7 号主体部は盛土が消失していたため築造順位は不明である。

墳形は、盛土下に旧地表が認められないことから若干の改変があるにしても、地山の隆起を大方そのまま利用したためか、歪で、北側裾は丸味を持ち、他は台形様で辺をなしている。墳



第 4 図 第 1 号墳土層図 (1 北トレンチ, 2 東トレンチ)

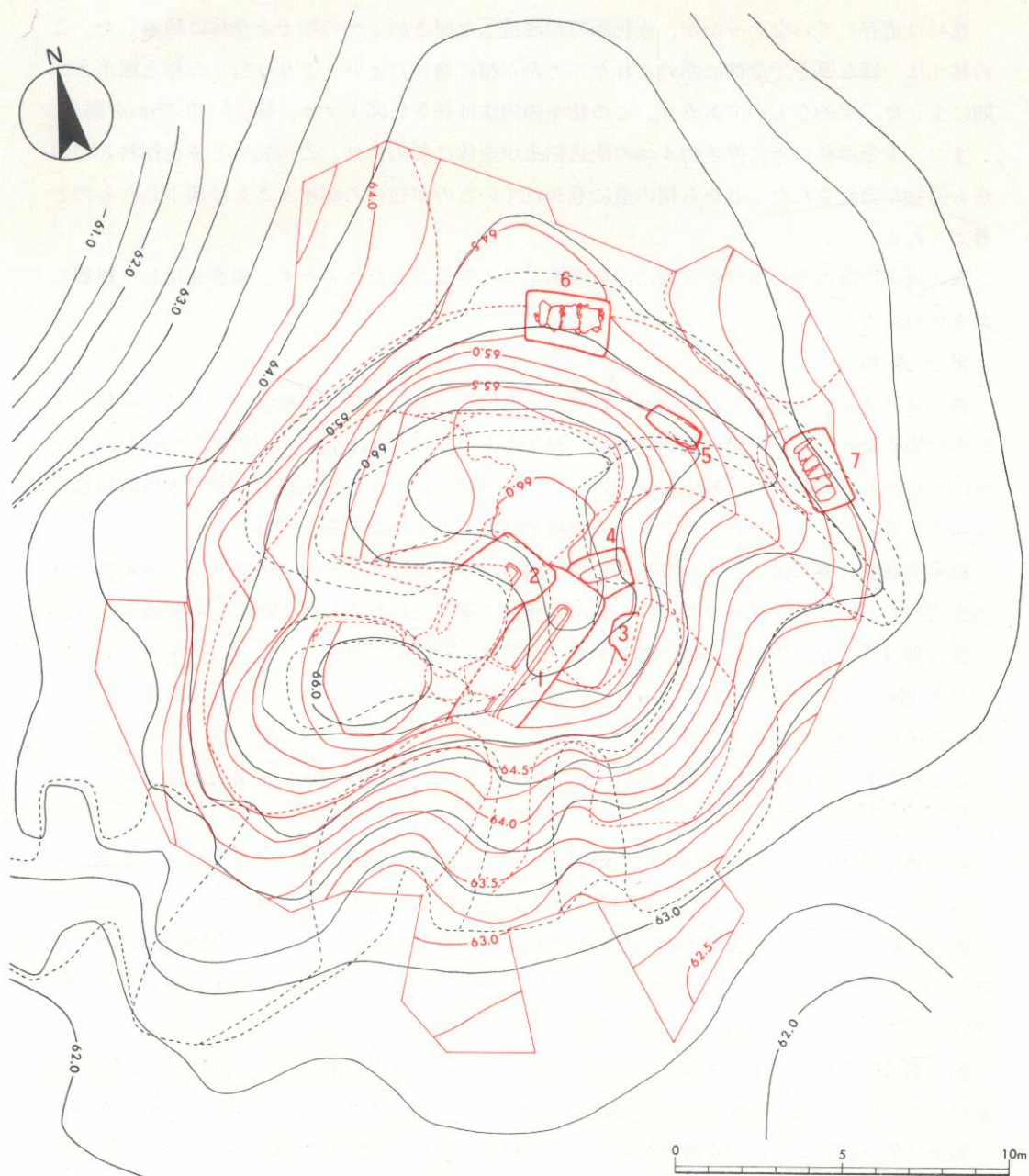


第5図 第1号墳発掘前（西から）



第6図 第1号墳全景（リモコン機の撮影による）

頂部は、地山を削平し平坦（約6.5m×10.0m）にしているが、頂部の中央から西側の地山は粘質の強い花崗岩の風化土のため、削平時にブロック状に剥がれ一部に凹凸が激しい。



第7図 地形実測図

2 1号主体部

平坦に削平した墳頂の西端に掘り込んだ狭長な割竹型木棺を検出した。棺を安定させるために掘り方の中央に丸味を持った凹みをつくり、その中に暗灰色ないし黄灰色を呈す砂質土を敷いている。

棺材は遺存していなかったが、赤色顔料が浸透した厚さ約1cmの粘土を全体に検出した。この粘土は一樣な厚さで全体に認められたことから棺に巻いたというよりはむしろ棺と埋土との間に生じた二次的なものであろう。この粘土の内法は長さ $4.05 + \alpha$ m、幅0.5~0.55mを測る。

また、赤色顔料の上に厚さ約4cmの灰色粘土が全体に認められ、この粘土と赤色顔料との間から遺物が発見されたことから棺の蓋に巻かれていたのが棺材の腐殖とともに落下したものと考えられる。

櫛の出土位置のすぐ南付近は特に赤色顔料が多く発見されたことから、頭を北にして埋葬したと思われる。

出土遺物

第1号主体部から検出した遺物は、鉄剣1・直刀1・針1・鉄斧形鉄器1・刀子3・鉋1・U字形鋤先1・勾玉1・滑石製白玉多数・櫛である。出土位置は全て、木棺内で、大別して2ヶ所に分かれる。すなわち、推定頭位置の上に、櫛・鏡・白玉・勾玉・鉄刀・針で木棺南端近くに鉄剣を置いている。また、勾玉と白玉は紐で結ばれたような状態で発見した。

鉄斧形鉄器（第13図1） 全長8.6cm、最大巾3.8cmの無肩形である。袋部断面は3.1cm×2.2cmの長円形で合わせ目はわずかに判別できる。縦断面は二等辺三角形で刃部は使用による磨滅がみられる。

鉋（第13図2） 復原長18cm、厚0.2cm、巾1.0cm、茎部厚0.3cm

刀子（第13図3~5） 折れているうえ、鉄斧形鉄器に銹着しているので全長は定かでないが10cm前後か。鋒を欠損する。最大巾は1.3cm

U字形鋤先（第13図6） 現存長5.9cm、身巾10.5cm、刃部厚0.4cm。刃先は角張っており、未使用のものかと思われる。

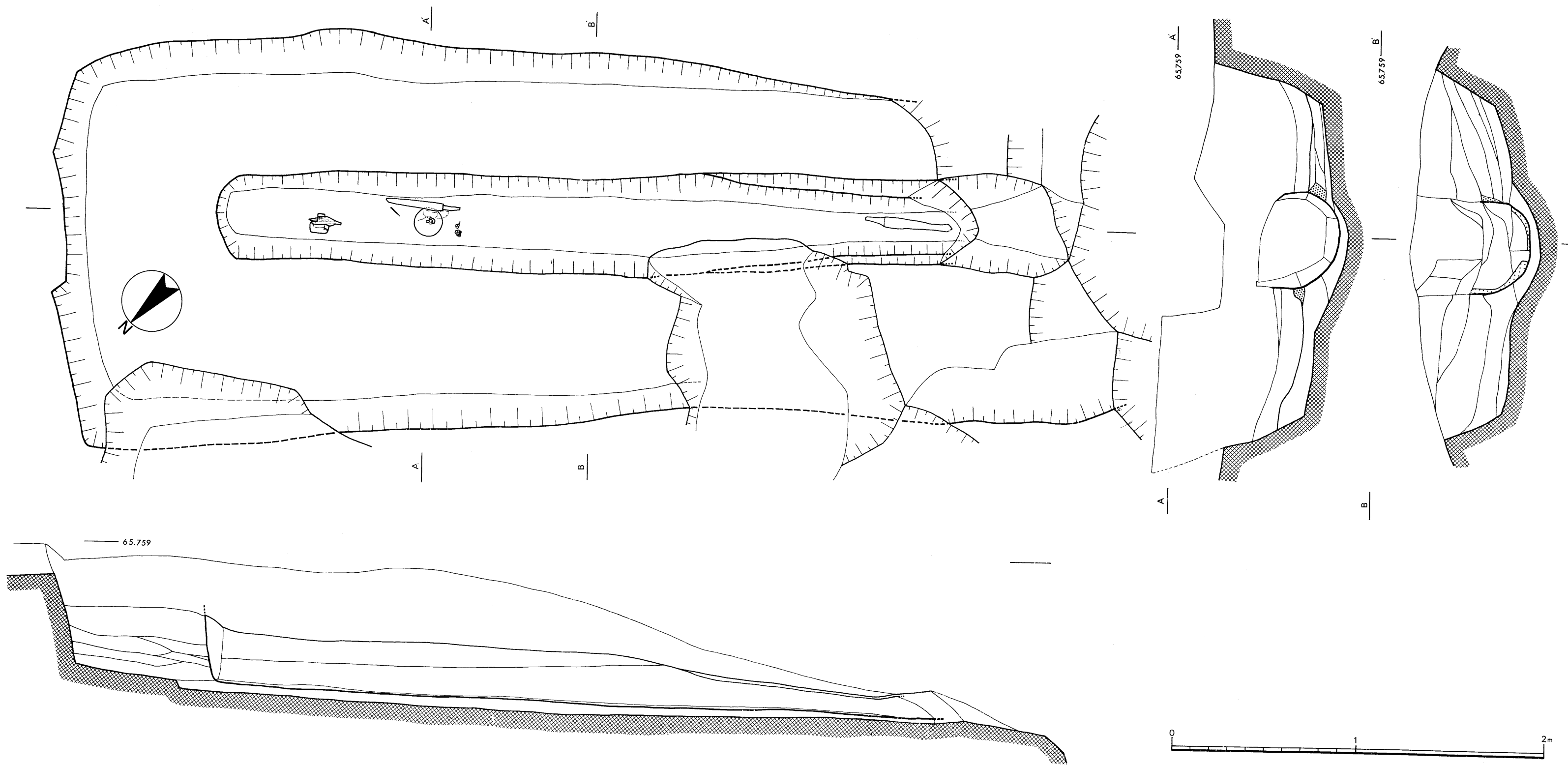
針（第13図7） 全長61.5cm、身の断面は巾0.1cm、厚0.075cmの長方形を呈する。先端から0.7cmほどはとがれて鋭い。針穴は上端部から0.15cmの位置にある。

直刀（第13図8） 全長40.4cm、刃わたり30.7cm、身巾は中ほどで2.8cm、最大部3.3cm、身厚0.9cm。茎は長さ9.7cm、巾1.2cm~2.2cm、厚0.7cmであり木質が付着しているため目釘穴の所在は定かでない。部分的に鞘の木質が残存している。

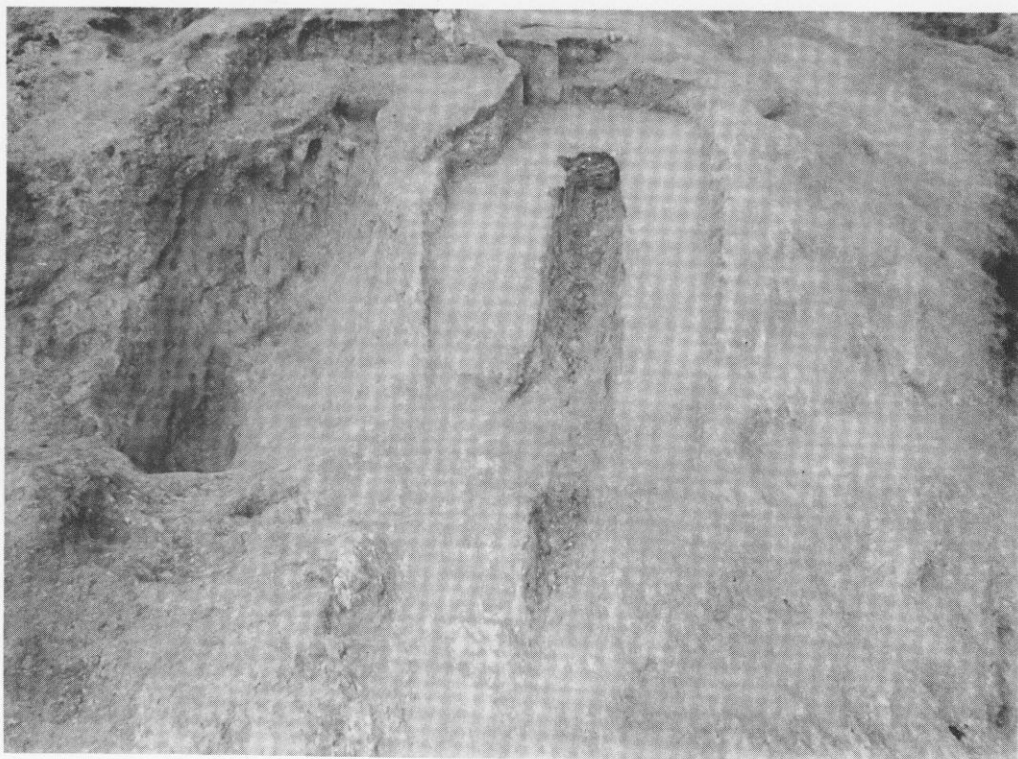
剣（第13図9） 切先を欠損しており、残存長は45.8cm、身巾2.6~3.6cm、身厚0.4~0.5cm。関部付近には鞘の木質が遺存している。茎は巾1.8cm、厚0.3cm、長さ10.8cmで二箇所目釘穴がある。

勾玉（第14図） いわゆる滑石製の勾玉で、全長4.0cm、胴部巾1.6cmを測る。

白玉（第14図） 0.4~0.5cmを測る滑石製の白玉である。



第8图 1号主体部实测图

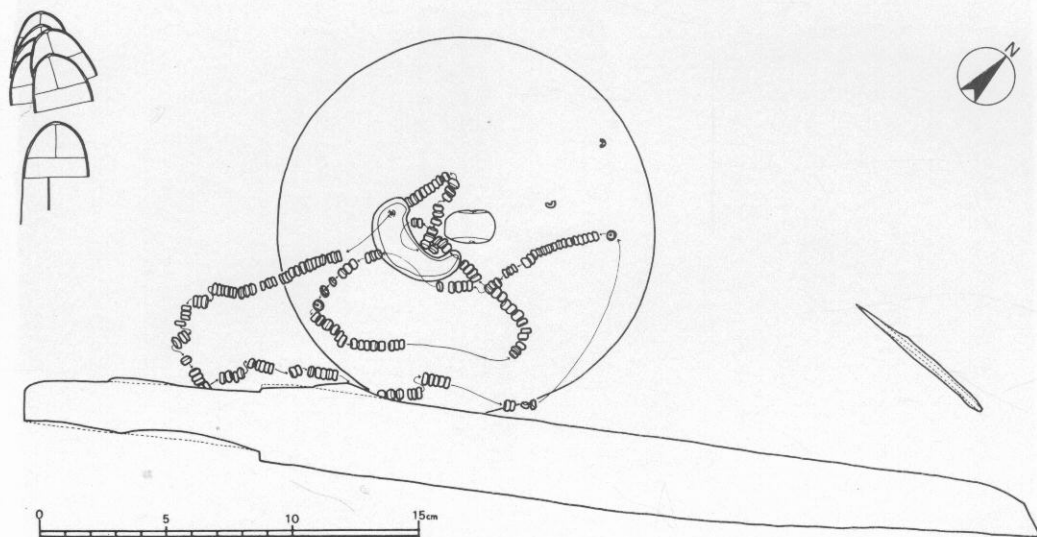


第9図 1号主体部（南から）

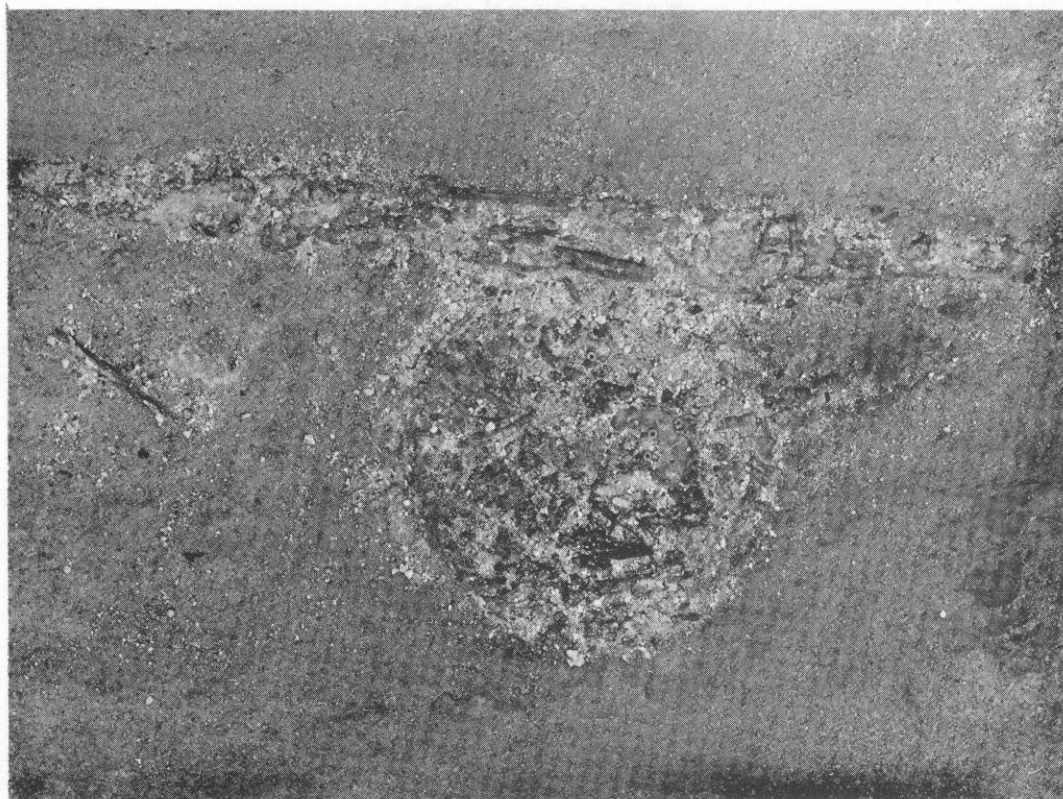


第10図 1号主体部（西から）

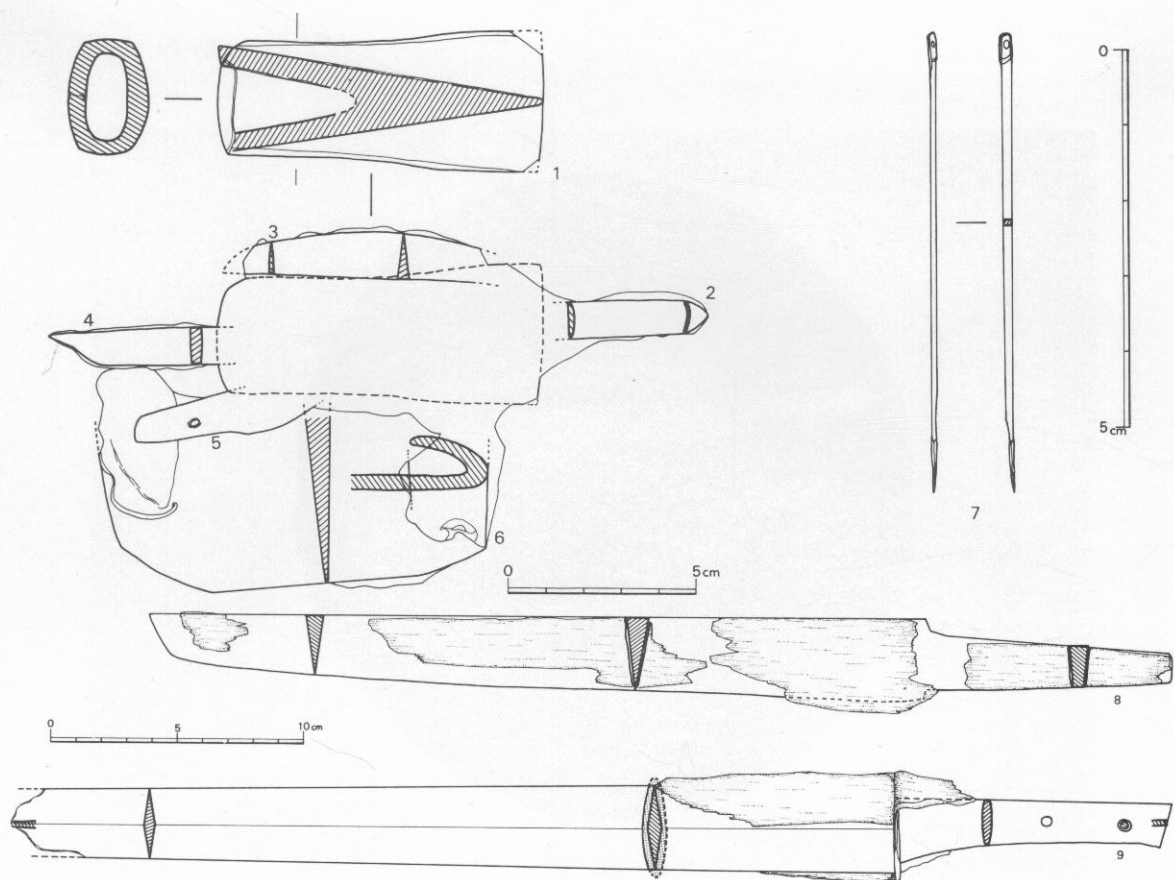
櫛 (第14図) いづれも簪を曲げ黒漆で頭部を固めている。頭部計測値は、 $2.2 \cdot 2.6 \cdot 2.7 \cdot 2.8 \cdot 2.9 \cdot 3.0 \cdot 3.1\text{cm}$ を測る。



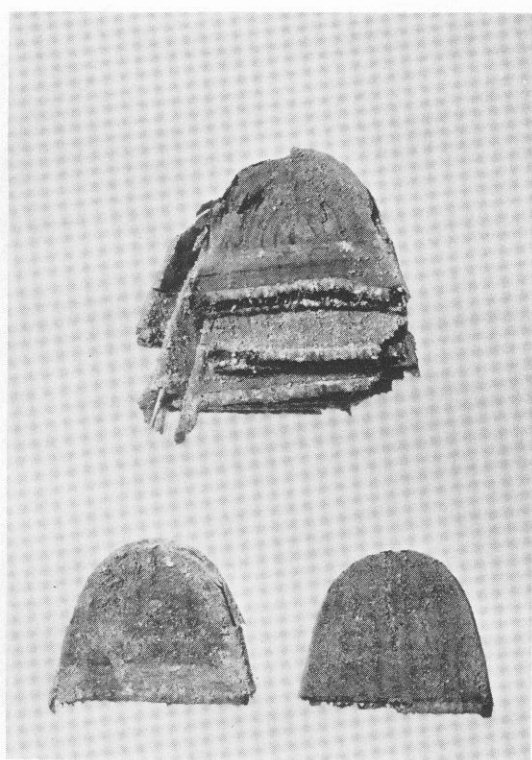
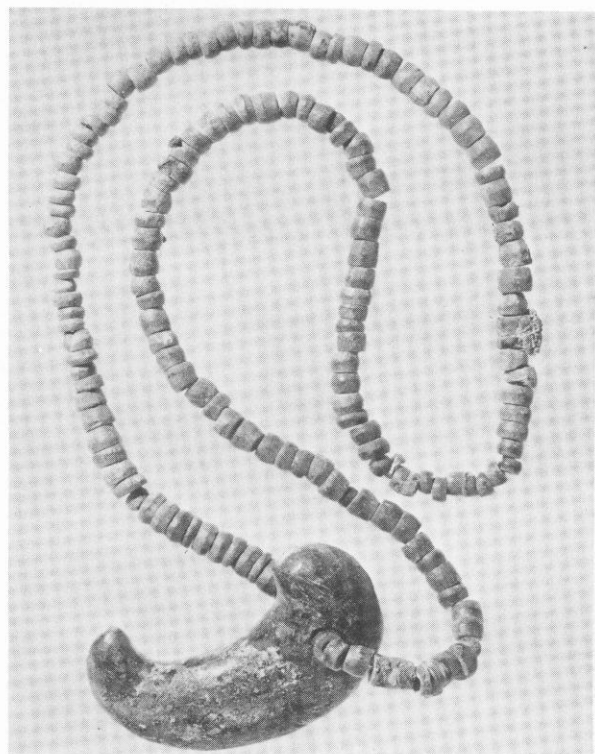
第11図 櫛，鉄刀，白玉，勾玉，鏡，針出土状態実測図



第12図 櫛，鉄刀，白玉，勾玉，鏡，針出土状態



第13図 鉄斧，刀子，鉋，鋤先，鉄刀，鉄剣実測図



第14図 勾玉，白玉，櫛（実大）



第15図 鏡（表）



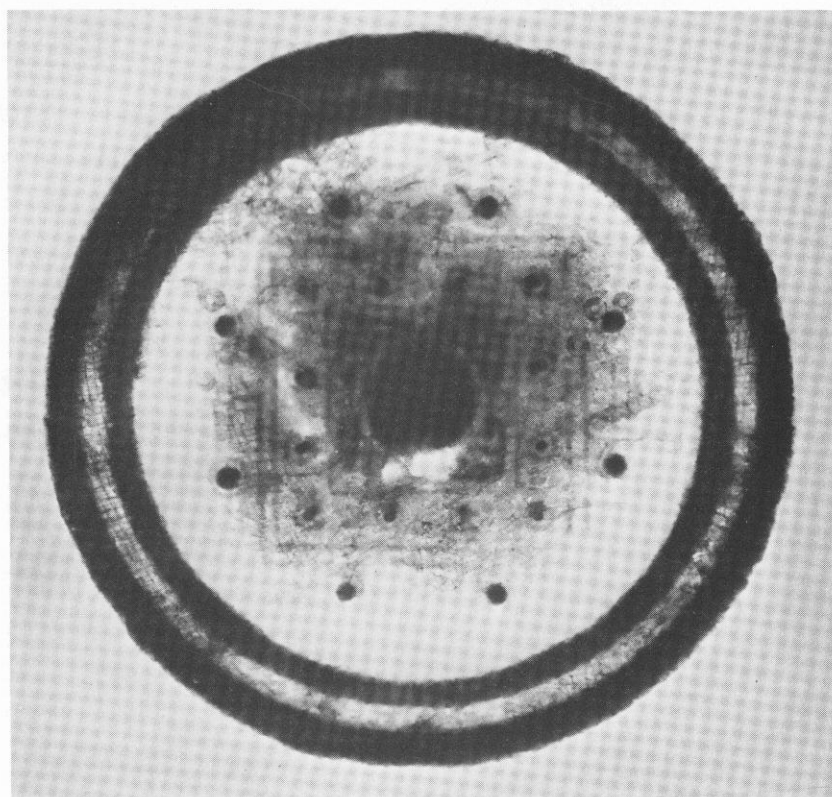
第16図 鏡（裏）

鏡 (第17図) この鏡の表面には目の粗い麻布が附着し、背面には絹と思われる目のこまかい布、玉等が錆着しており、当初方格規矩鏡であろうとの推定がついたのみで、文様の詳細等は不明であった。

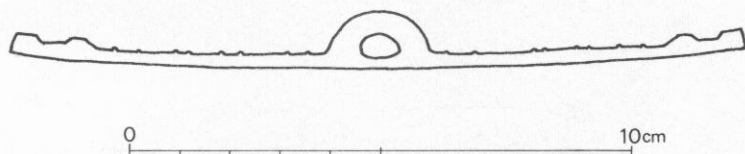
文様を知るために福岡県金属工業試験場に依頼してX線撮影を行なった。その結果は下記のとおりである。

径144mm、鏡縁の反り4mm、縁厚5mm、鈕高115mmを測る。縁は2重になっており、その間に銘帯を有するが、銘文は現状では判読不可能である。縁の内側に、中に珠文を有する隆線の鋸歯文がある。方格は2重で、その外側に8個の乳、間に12個の乳を有する。十二支の銘はない。規矩のうち矩だけしかなく、又、鋸歯文と方格の間には四神・四獣はない。四葉文の鈕座を有し、鈕には紐が残っている。

鏡縁を2重につくり、その間に銘帯をつくるものは方格規矩鏡としては異例に属すが、波状



文を有するものは方格規矩日利大万鏡等に類例がある。又、半円方格帯神獸鏡にはこの部分に銘帯を有するものがある。これらのことから、鏡の製作年代は後漢末～三国初期に推定できよう。



第17図 出土鏡X線写真 (2/3大)

3 2号主体部

墳頂の中央部で検出した主体部で、1号主体部と同様に割竹型木棺を埋置していたと考えられる。西から大きく攪乱を受け北側の一部しか残存していない。1号主体部と同様に、木棺を安置させるために掘り方の底に砂質土を敷いている。赤色顔料は、木棺内面だけでなく、掘り方の底面全体に塗布し、1号主体部よりも丁寧な地業がうかがえる。木棺内法幅（木棺は遺存していないので赤色顔料を基準として）約0.47mを測る。

1号主体部の掘り方の一部を切り、また、墳頂中央部に位置していることから第1号墳の中心的人物のものと考えられる。

4 3号主体部

1号主体部の東で検出した遺構で、東から大きく攪乱を受け、一部しか残存していない。木棺の痕跡や赤色顔料は認められないことから土坑墓であると考えられる。

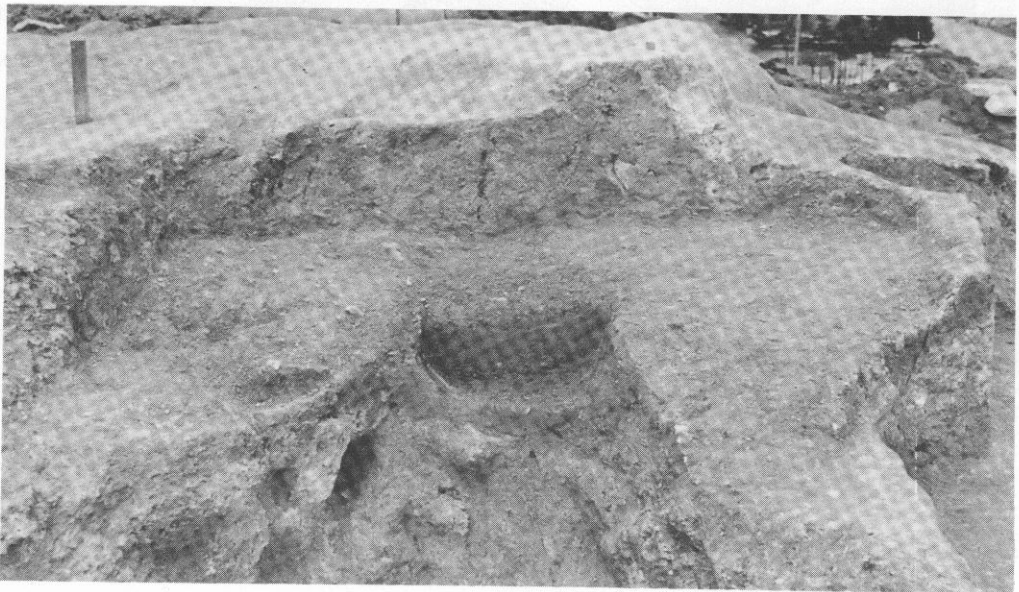
残存部寸法は $(1.45 + \alpha) \text{ m} \times (1.30 + \alpha) \text{ m}$ を測り、方形を呈す。

5 4号主体部

1号主体部により、掘り方の一部が切られ東からの攪乱で北側の掘り方・粘土床の一部が切られた遺構である。掘り方は $(1.75 + \alpha) \text{ m} \times 1.45 \text{ m}$ を測り、その中に $(1.2 + \alpha) \text{ m} \times 0.4 \text{ m}$ 、厚さ約1～2mを測る粘土を平坦に敷いている。この粘土床の端から外上方に立上りあり、周りに裏込めの土および石が認められることから箱型の木棺を埋置していたと考えられる、また、粘土床は南から北へ若干傾斜している。

6 5号主体部

5号主体部は、6号と7号主体部との間にあり、墳裾近くの傾斜面で発見した。この主体部も北側は削り取られていて全体の規模は知り得ない。掘り方は長軸約1.9mを測り、その中に厚さ



第18図 2号主体部（南から）

約7cmの粘土を東半部だけに敷いている。そしてこの粘土は掘り方南壁に沿い、丸味を持って斜め上方に立上っている。木棺を入れたのか、粘土の上にそのまま埋葬したのかは不明である。掘り方および粘土は西から東へ傾斜している。

7 6号主体部

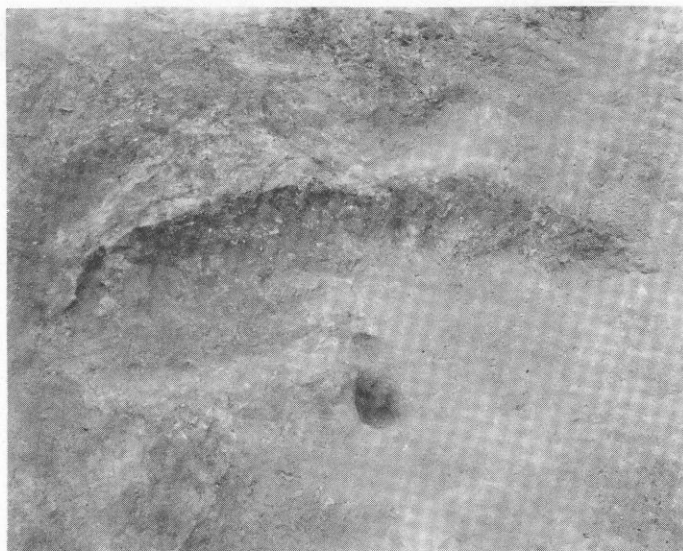
北側の墳裾から検出した石蓋土壇墓で、4号主体部と同様に古墳築成当初の遺構である。約2.5m×1.5mを測る隅丸方形の墓壇を持つ。蓋石は4個の花崗岩を使用し、間隙には小石を詰め、その上に粘土で目張りをし、更に粘土上面に赤色顔料を散布している。細長い舟形を呈す土壇の幅は、西は狭く約0.25m、東は広く約0.4m、深さ約0.35m、長さ1.36mを測る。土壇東端の両側壁に1条の溝があることから東側の小口には板を使用していたと考えられる。ちなみに、



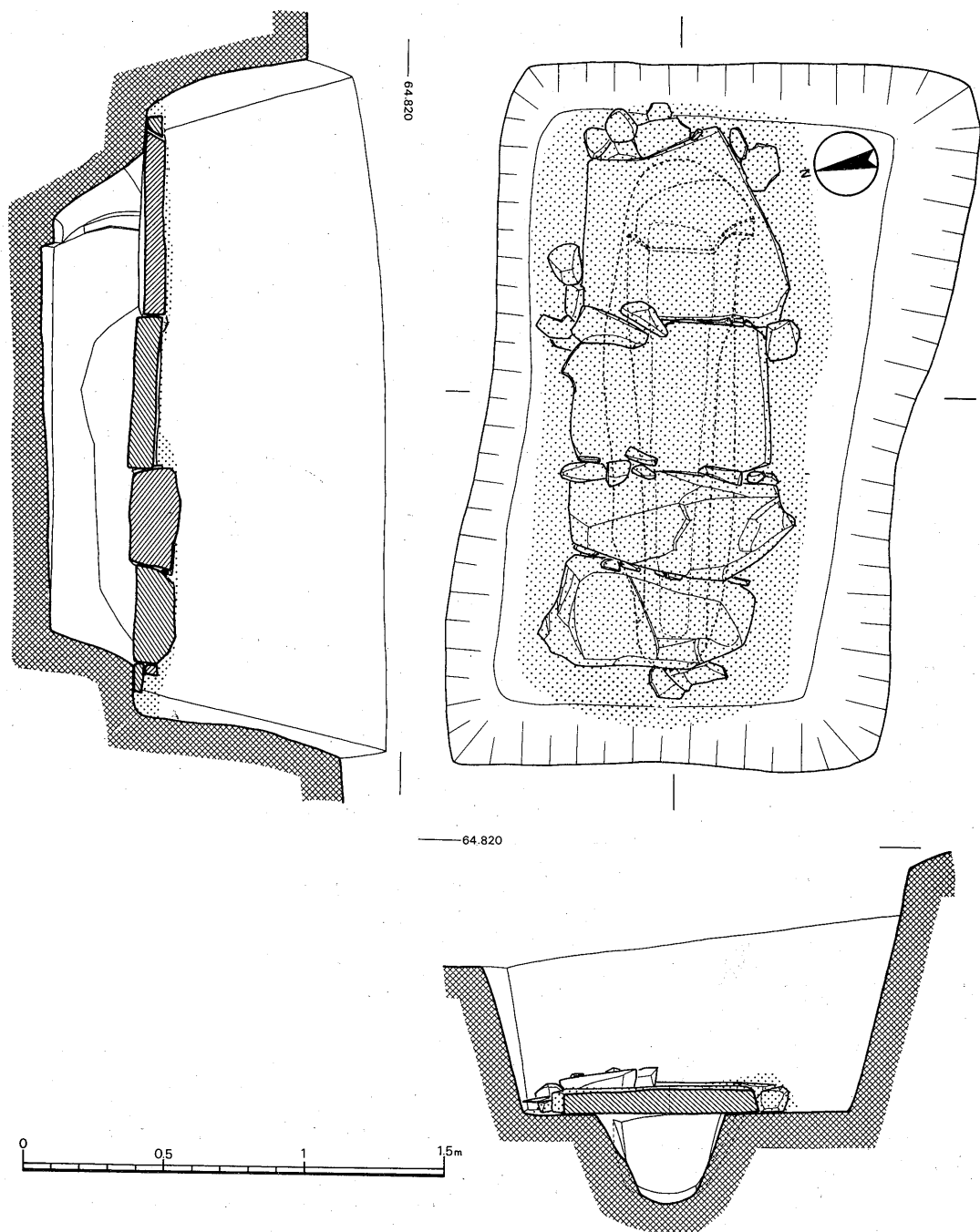
この土壇中に身長1.6mの大人が入って、寝てみたが到底無理であった。このことから、この主体部には子供を埋葬したと思われる。

8 7号主体部

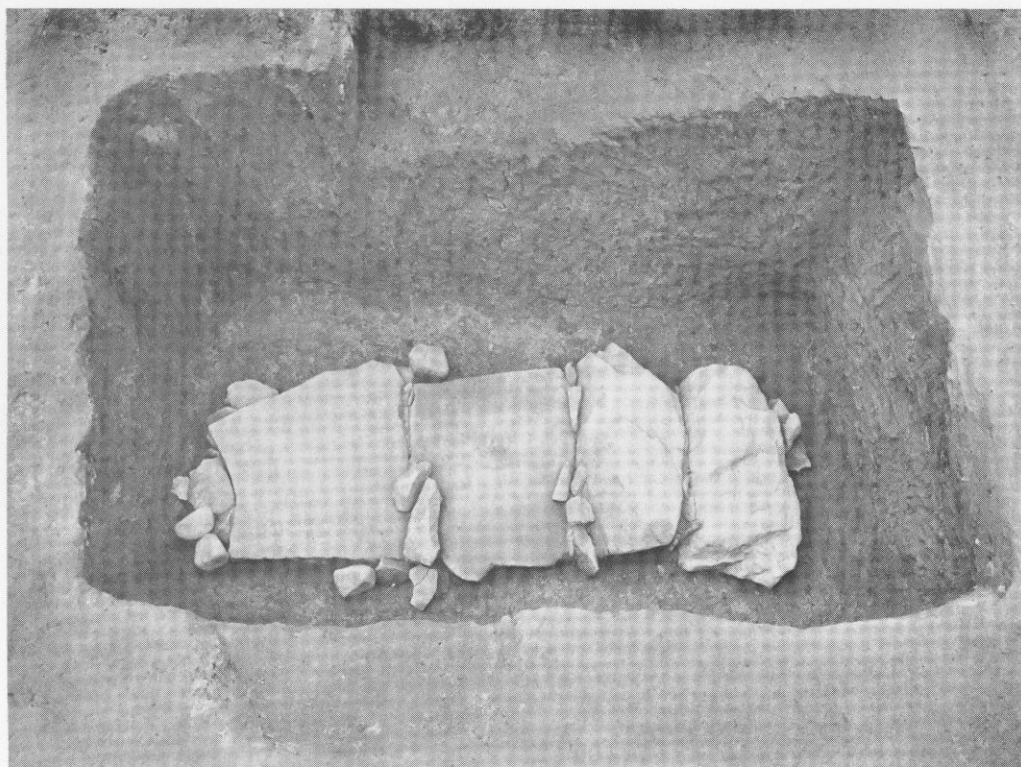
北東の墳裾で検出した石蓋土壇墓である。既に盛土は流失していた為、土壇掘削順位は不明である。墓壇は約2.4m×2.0mを測り隅丸方形を呈す。蓋石は6枚の花崗岩を使用し、6号主体部と同様に間隙には小石を詰め、その上に粘土で目張りをし、その上に赤色顔料を塗布している。土壇は西が狭く0.2m、東は0.35m、長さ1.7m、深さ0.2mを測る。6号主体部と同様に子供用のものであろう。



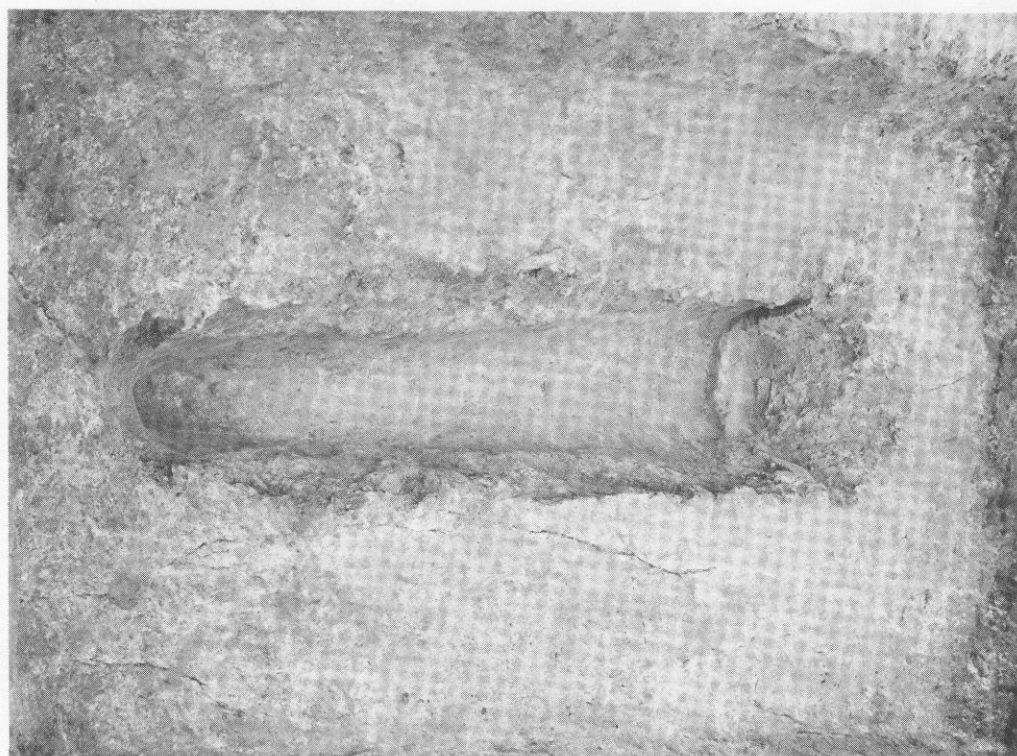
第19図 上 4号主体部（北から）、下 5号主体部（北から）



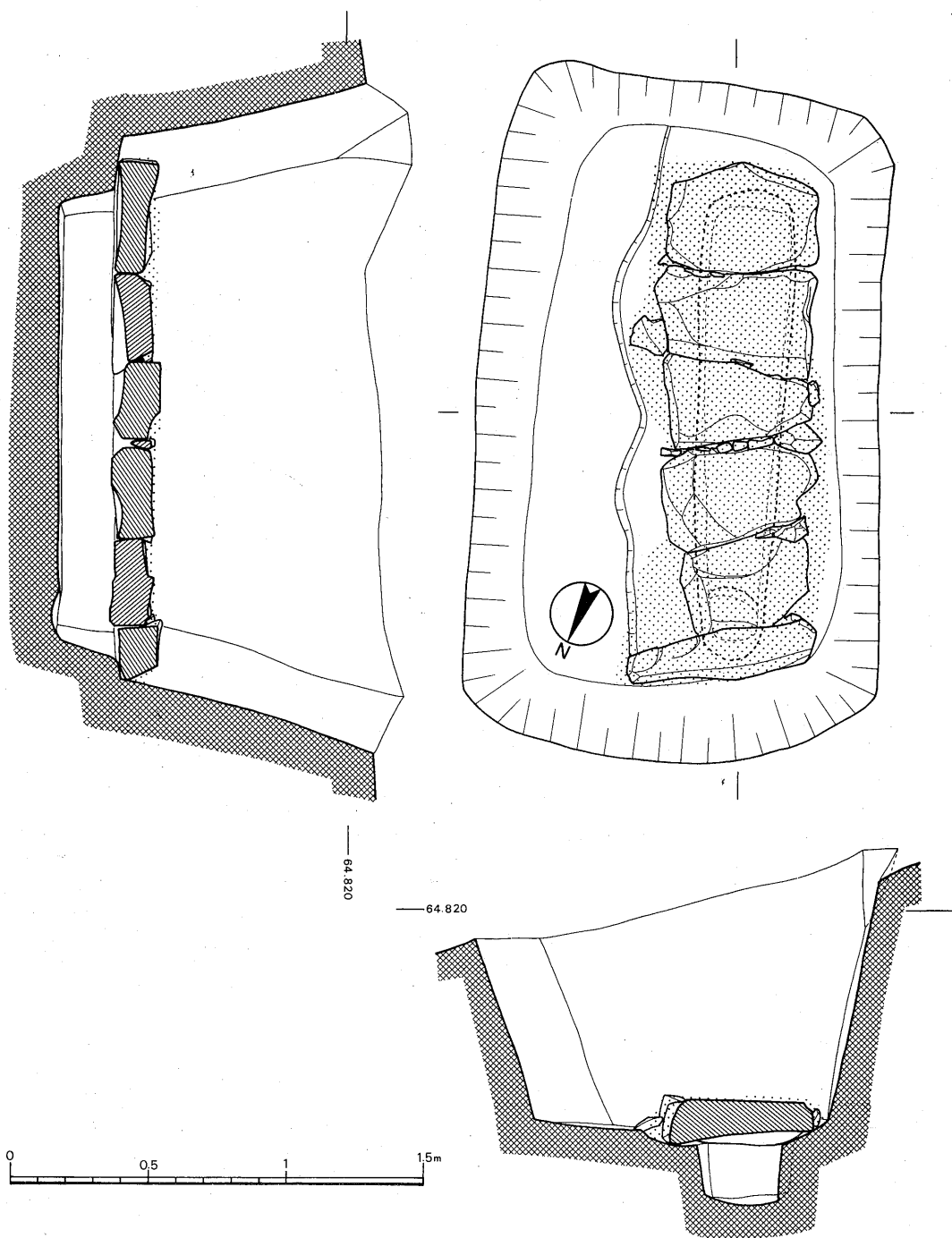
第20図 6号主体部遺構実測図



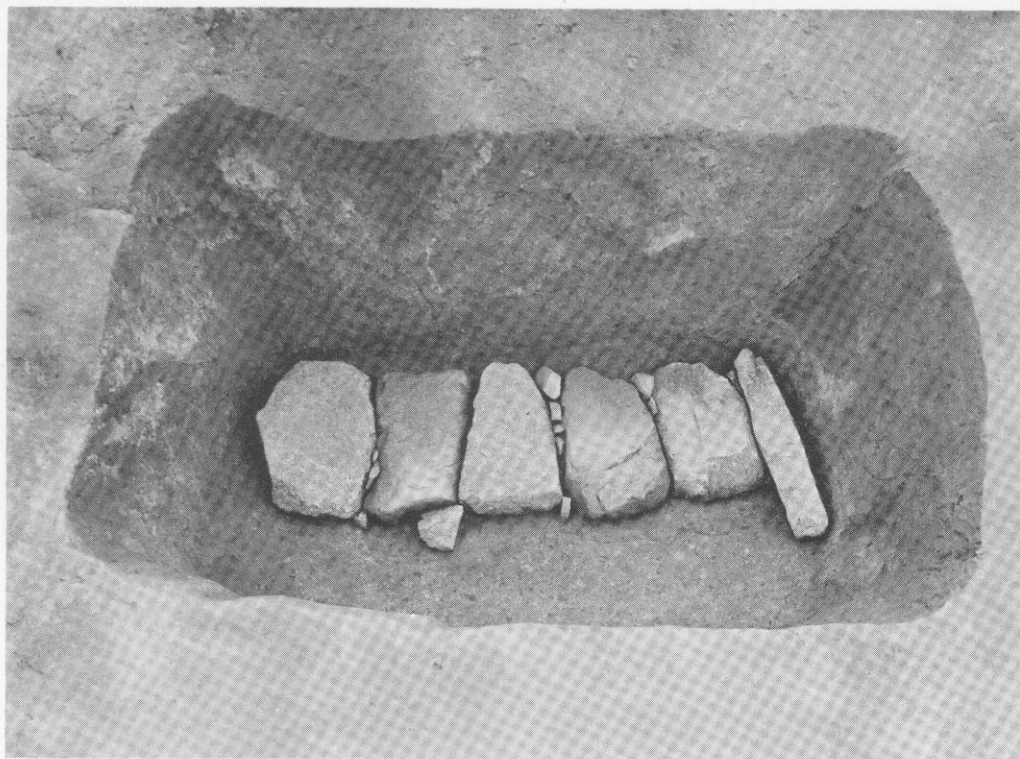
第21図 6号主体部（北から）



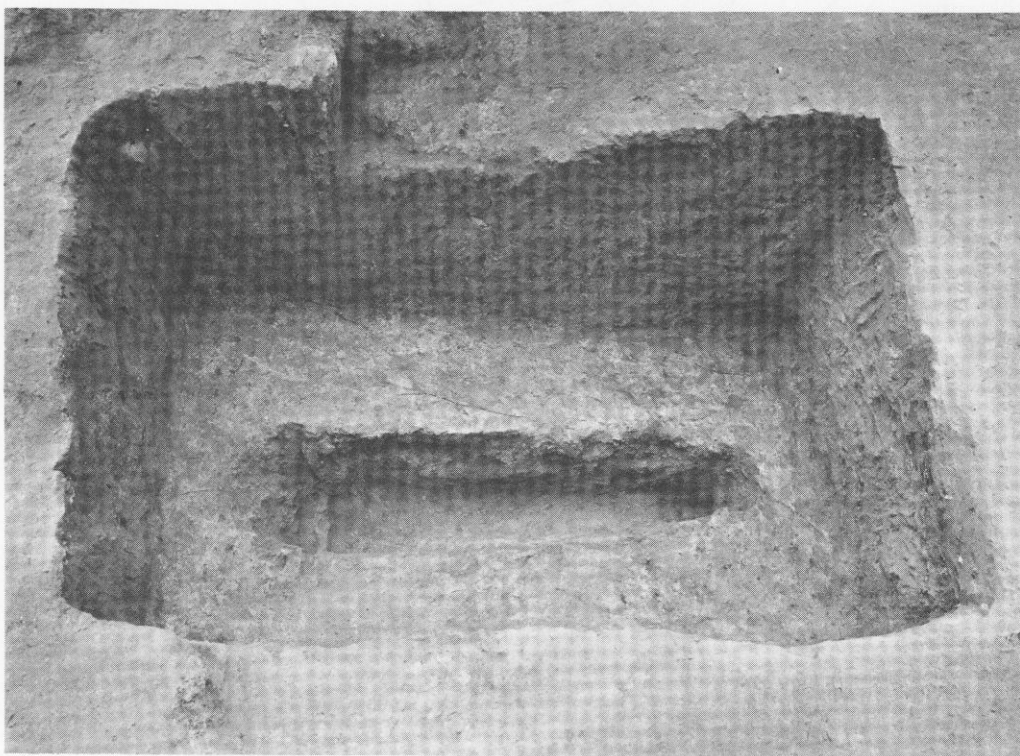
第22図 6号主体部石蓋除去後（北から）



第23図 7号主体部遺構実測図



第24図 7号主体部（北から）



第25図 7号主体部石蓋除去後（北から）

IV 第2号墳の調査

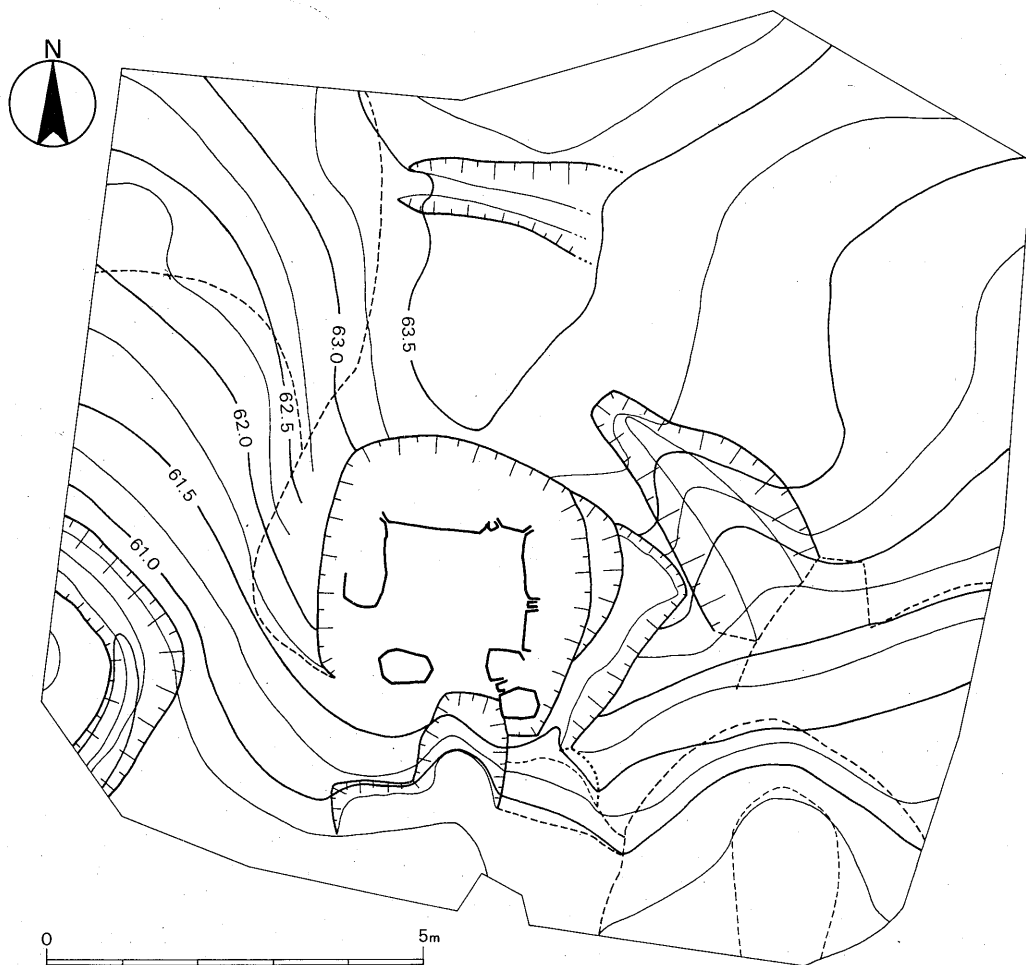
この2号墳は1号墳と同じ、ほぼ東西にのびる丘陵の南斜面、中腹に位置している。

斜面が急であることと、後世の削平も手伝ってか、盛土はほとんど失われており、旧状を留めていない。削られた所から石材らしきものが露出しており、それを目安に、ほぼ南北方向にトレンチを入れた。その結果、横穴式石室を検出した。

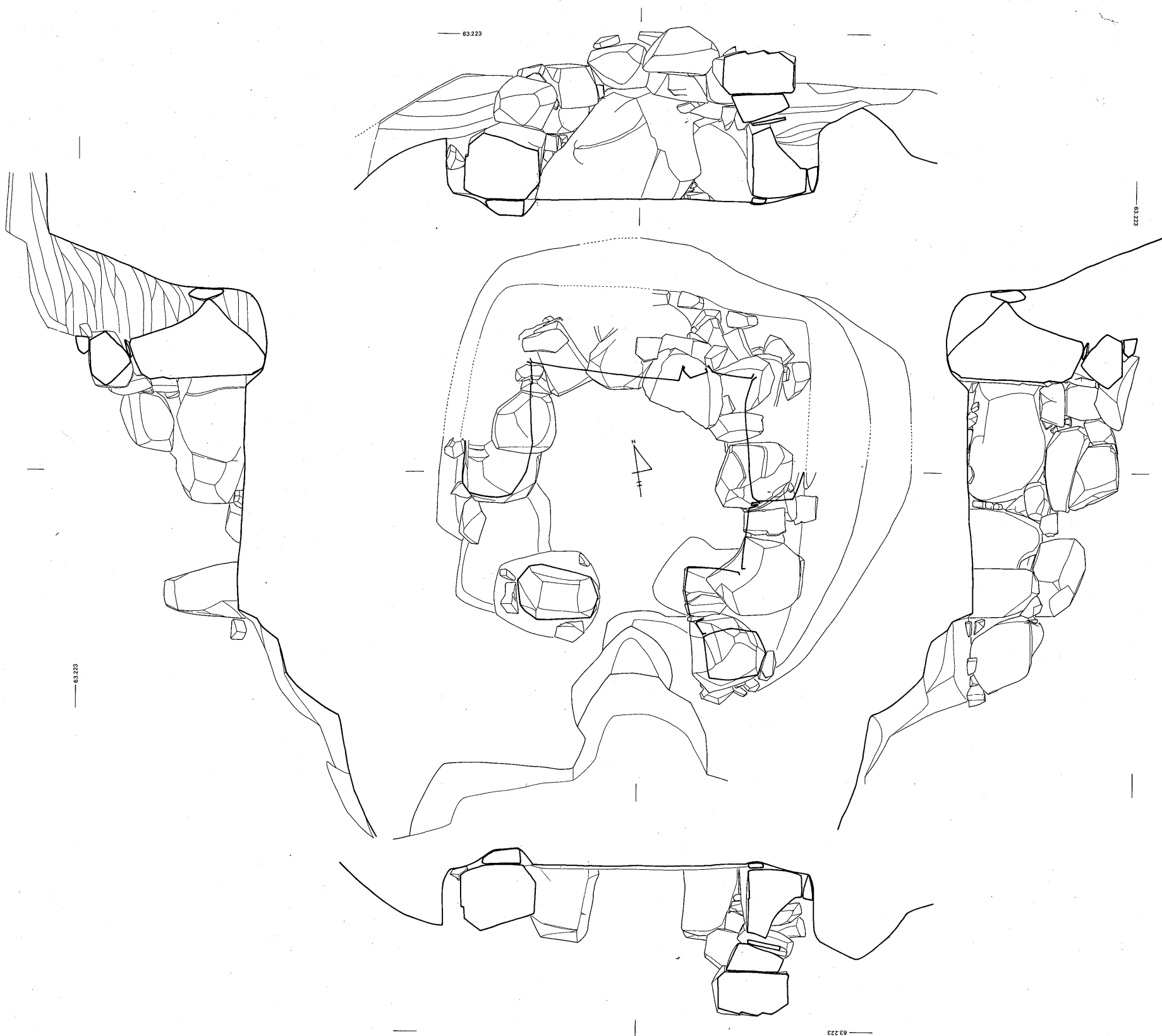
(墳 丘)

本古墳の規模、および構造をつかむため、石室に対し、東・北・西にそれぞれ土層観察面を残して、他を地山まで掘り下げた。その結果、石室の墓壇の他に、4本の溝を検出した。以下これらの溝について述べる。

墓壇に対し、北・東側にある3本の溝は、本古墳に関連するものと思われる。そのうち東側にある2本の溝については、墓壇との切り合い関係により、墓壇を掘る前に掘られている。そして、いずれの埋土にも腐植土等、長期間、溝としてあった形跡は認められず、短期間のうち



第26図 第2号墳盛土除去後地形実測図



第27図 石室実測図 (1/40)

に再び埋められたものである。さらに、もう一つの北にある溝は、地山の小突出を断ち切るかっこうで設けられており、本古墳の墓域を区画するものと考えられる。

また、残る1本の溝は、発掘区の西南隅に検出されたもので、ほぼ直角に曲るものである。本古墳との関連、その他は不明である。遺物は出土していない。

墓壇は、地山から掘り込まれ、最高1.6mほどの深さである。隅丸の方形プランを呈する。

さて、本古墳の当初の規模であるが、先述した北の溝を考えると、少なくとも墳裾が、この溝を超えることはない。従って、本古墳の規模としては、石室が墳丘の中心に構築されたと仮定すると、石室中心から溝までの距離は約5mを測るため、直径10m前後の円墳であるといえることができる。

(石 室)

本古墳の石室は、主軸をN-40°-Eにとり、谷に向って開口する。袖石が両方からつき出す、いわゆる、両袖型の石室である。

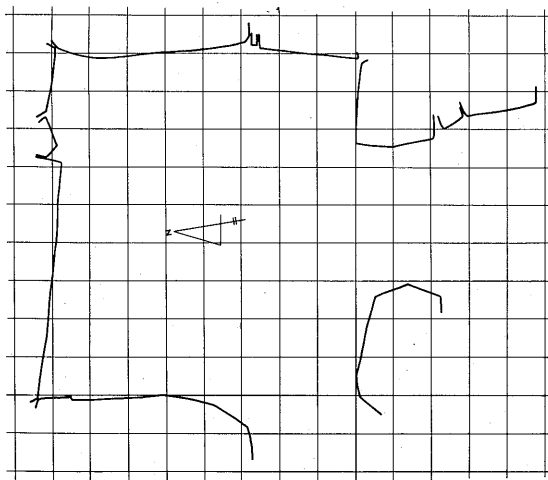
玄室は縦1.5m、横1.8mの方形プランを示す。周壁の状態については、奥壁には2枚の大石を立て、両側壁基部には、大石の横口面を内に向けて置き、それより上部は、三壁ともに、横口、小口積をおりませ、三方から持ち送りを行っている。裏ごめは、奥壁部が明瞭で、大きく2ブロックに分れる。腰石の上端部までと墓壇を満すまでとである。下半は、赤系色と黄系色を互層に、上半では、それに茶系色加わる。

袖石は両方とも立てられており、その間の仕切石は検出されなかった。

羨道部は、東壁の腰石一個が存在するだけで詳細は不明である。尚、玄室、羨道、ともに床石はない。

遺物は、わずかに攪乱土中より須恵器片が出土したのみである。

最後に本古墳の築造の時期であるが、石室の構造、立地等からみて、古墳時代終末期に位置付けられよう。



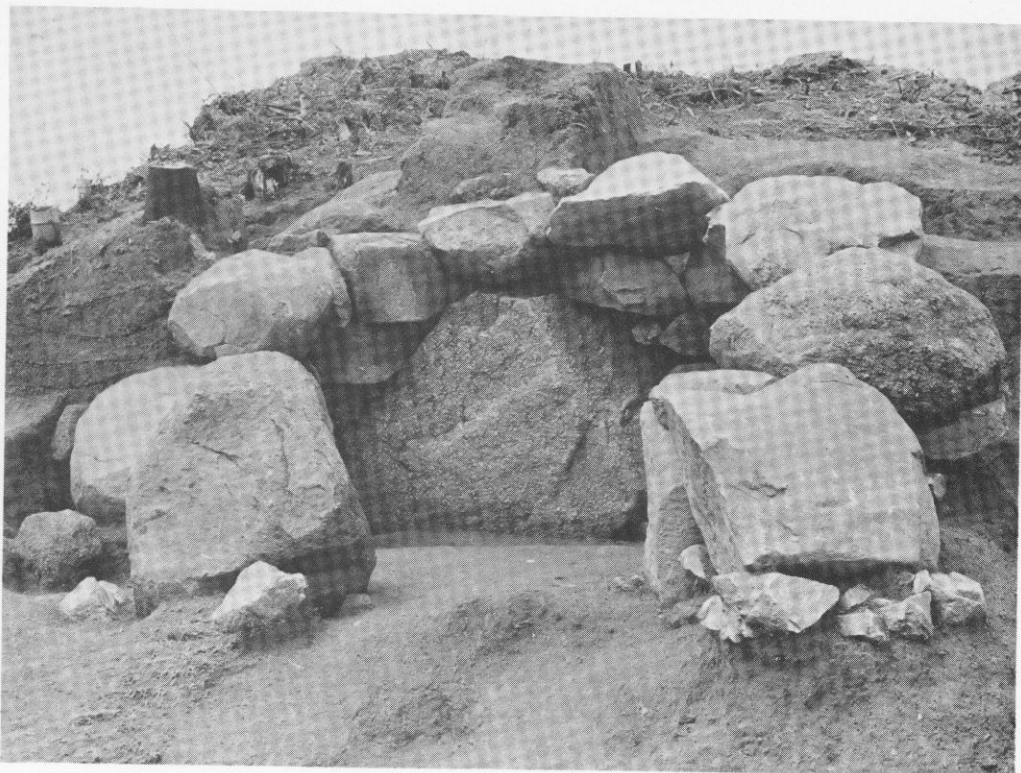
第28図 第2号墳石室平面図（方眼は20cm×20cm）



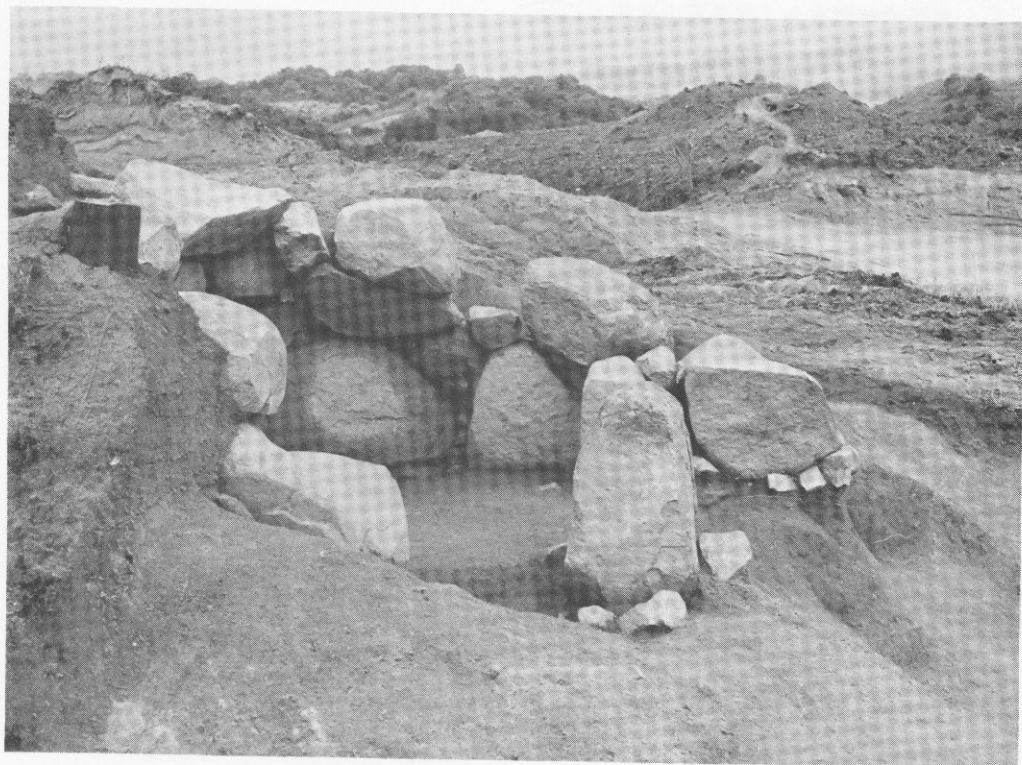
第29図 第2号墳発掘前（西から）



第30図 第2号墳全景（南から）



第31図 第 2 号 墳 石 室 (南から)



第32図 第 2 号 墳 石 室 (西から)

V お わ り に

第1号古墳は、調査着手時の予想を起え、7基の主体部を持つ古式古墳であることが調査により判明した。そこで、調査時に気付いたことを2・3記し、おわりにしたい。

まず、割竹型木棺を主体部とする古墳は県下では非常に少なく、6遺跡を数えるのみである。

次に、主体部の築成順位は4・6号主体部→1号主体部→2号主体部の順で、もっとも墳丘中央部に位置している2号主体部が最後に地業されていることは興味深い。また、3・4・5・6・7号主体部は、1・2号主体部を取り巻くように配置され、その構造も土壇墓・箱型の木棺墓・石蓋土壇墓と規格性はなく、規模も小さく、副葬品も持たないといった事実の意味することも大きな問題点を提起するものであろう。

主体部の配置が、墳丘東半部に集中しているのは、地山の硬・軟に原因があると考えられ、主体部の造られた場所は全て軟らかい花崗岩の風化土の所であった。

註

1. 福岡県教育委員会「油田古墳群」福岡県文化財調査報告書第42集 1969
2. 野田・峠山遺跡で福岡県教育委員会の調査により1基検出している。
3. 福岡県教育委員会『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第2集』「若八幡古墳」1971
4. 福岡市教育委員会「京ノ隈古墳」福岡市文化財だより第2集 1975
5. 恵子遺跡調査会「恵子若山遺跡」1975
6. 大任町教育委員会「狐塚古墳・横穴群」大任町文化財調査報告書第1集 1976

太宰府町の文化財

第 1 集

昭和51年 3 月31日

発 行 太宰府町教育委員会
筑紫郡太宰府町大字観世音寺

印 刷 青柳工業株式会社印刷部
福岡市中央区古小島70番地